

1

(A) (a) 座標 $x_0 (< 0)$ の場所にあるときの弾性力は $k|x_0| = -kx_0$ であり、これが最大静止摩擦力大きければよい。したがって

$$\mu mg < -kx_0 \quad \therefore x_0 < -\frac{\mu mg}{k}$$

(b) 位置 x における加速度を a として、運動方程式を立てると

$$ma = -kx - \frac{2}{3}\mu mg = -k\left(x + \frac{2\mu mg}{3k}\right)$$

したがって、振動の中心は $x_1 = -\frac{2\mu mg}{3k}$

(c) 崖から飛び出すには、 $x = 0$ で速度をもっていればよく。振動の中心が $\frac{x_0}{2}$ よりも右側にあればよい。

$$\frac{x_0}{2} < -\frac{2\mu mg}{3k} \quad \therefore x_0 < -\frac{4\mu mg}{3k}$$

(d) x_0 が指定文字に入っていないので、小球の水平投射について考える。小球が崖で投げ出されてからピストンにあたるまでの時間を t として、 x 方向、 y 方向の等加速度運動の変位の式を立てると

$$\begin{cases} L = v_{x0}t \\ -h = 0 - \frac{1}{2}gt^2 \end{cases}$$

以上から t を消去して、 v_{x0} について求めると、 $v_{x0} = L\sqrt{\frac{g}{2h}}$

(B) (e) 圧力 $p + \Delta p$ 、体積 $V + \Delta V$ 、絶対温度 $T + \Delta T$ での状態方程式より

$$\begin{aligned} (p + \Delta p) \cdot (V + \Delta V) &= nR \cdot (T + \Delta T) \\ \therefore pV + p \cdot (\Delta V) + (\Delta p) \cdot V + (\Delta p) \cdot (\Delta V) &= nRT + nR\Delta T \end{aligned}$$

圧力 p 、体積 V 、絶対温度 T のときの状態方程式が $pV = nRT$ なので

$$p \cdot (\Delta V) + (\Delta p) \cdot V + (\Delta p) \cdot (\Delta V) = nR\Delta T$$

両辺 $pV = nRT$ で割る。(左辺は pV で右辺は nRT で)

$$\frac{\Delta V}{V} + \frac{\Delta p}{p} + \frac{\Delta p}{p} \cdot \frac{\Delta V}{V} = \frac{\Delta T}{T}$$

$\frac{\Delta p}{p} \cdot \frac{\Delta V}{V} \approx 0$ の近似より

$$\therefore \frac{\Delta p}{p} + \frac{\Delta V}{V} \underset{(\tau)}{=} \frac{\Delta T}{T} \quad \dots(*)$$

また、単原子分子理想気体の内部エネルギー変化は $\Delta U = \frac{3}{2}nR_{(1)}\Delta T$
断熱変化における熱力学第一法則より

$$\frac{3}{2}nR\Delta T = 0 - p\Delta V \quad \therefore \Delta T = -\frac{2p}{3nR_{(2)}}\Delta V$$

状態方程式から $p = \frac{nRT}{V}$ を代入して整理すると

$$\therefore \Delta T = -\frac{2T}{3V}\Delta V \quad \dots(2^*)$$

(2*) より, $\frac{\Delta T}{T} = -\frac{2\Delta V}{3V}$ を, (*) に代入して

$$\begin{aligned} \frac{\Delta p}{p} + \frac{\Delta V}{V} &= -\frac{2\Delta V}{3V} \\ \therefore \Delta p &= -\frac{5p}{3V_{(3)}}\Delta V \quad \dots(3^*) \end{aligned}$$

(f) ピストンのつり合いの式より

$$p_0 \times \pi r^2 + Mg = p_1 \times \pi r^2 \quad \therefore p_1 = p_0 + \frac{Mg}{\pi r^2}$$

(g) 衝突直前の小球の速度の y 成分の速度 $V_y (< 0)$ は, 等加速度運動の時間消去の式より

$$V_y^2 - 0^2 = 2 \times (-g) \times (-h) \quad \therefore V_y = -\sqrt{2gh}$$

衝突直後のピストンの速度を v'_y , 小球の速度の y 成分を V'_y として, y 方向の運動量保存則, および反発係数の式より

$$\begin{cases} m \times (-\sqrt{2gh}) + M \times 0 = mV'_y + Mv'_y \\ 1 = -\frac{V'_y - v'_y}{-\sqrt{2gh} - 0} \end{cases}$$

これを解いて, $v'_y = -\frac{2m}{M+m} \cdot \sqrt{2gh}$

(h) ピストンが y だけ変位したとき, 体積変化は $\Delta V = \pi r^2 y$ である. また, ピストンにはたらく力は, 容器内部の圧力変化を Δp として, 上向きに $(p_1 + \Delta p) \times \pi r^2$, 大気がおす力が下向きに $p_0 \times \pi r^2$, ピストンの重力が Mg なので,

$$F_y = (p_1 + \Delta p) \times \pi r^2 - p_0 \times \pi r^2 - Mg$$

(f) のつり合いの式より, $p_0 \times \pi r^2 + Mg = p_1 \times \pi r^2$ であるから

$$= \pi r^2 \Delta p$$

(3*) より $\Delta p = -\frac{5p_1}{3V}\Delta V$ であり, $V = \pi r^2 l$, $\Delta V = \pi r^2 y$ より, $\Delta p = -\frac{5p_1 y}{3l}$

$$= -\frac{5\pi r^2 p_1}{3l} y$$

(i) ピストンの加速度を β として運動方程式を立てると

$$M\beta = -\frac{5\pi r^2 p_1}{3l}y = -k_1 y$$

この運動方程式より、変位 y におけるピストンの速さを v とすると、単振動のエネルギー保存則

$$\frac{1}{2}Mv^2 + \frac{1}{2}k_1 y^2 = \text{一定}$$

が成り立つ。 $y = 0$ のとき、 $v = v'_y$ 、 $y = A_1$ のとき $v = 0$ であることから

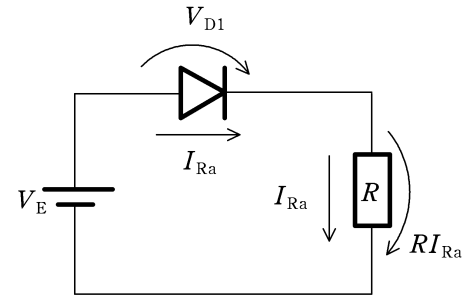
$$\begin{aligned} \frac{1}{2}Mv_y'^2 &= \frac{1}{2}k_1 A_1^2 \\ \therefore A_1 &= |v_y'| \sqrt{\frac{M}{k_1}} = -v_y' \sqrt{\frac{M}{k_1}} \end{aligned}$$

2

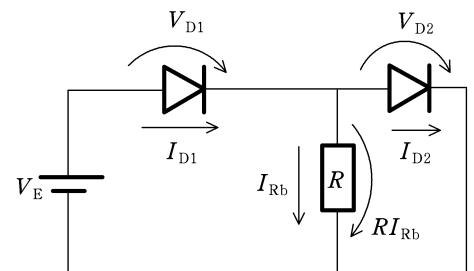
(A) (a) ダイオード D1 の電圧を V_{D1} とする。キルヒホッフの法則と、ダイオードの特性の式より

$$\begin{cases} V_E - V_{D1} - RI_{Ra} = 0 \\ I_{Ra} = \frac{V_{D1} - V_T}{r} \end{cases} \quad \therefore I_{Ra} = \frac{V_E - V_T}{R + r}$$

また、 $I_{Ra} > 0$ になるのは、 $V_E > V_T$ だから、 $V_{Ea} = V_T$



(b) ダイオード D1, D2 に流れる電流を I_{D1} , I_{D2} とし、電圧を V_{D1} , V_{D2} とする。電池、ダイオード D1, 抵抗まわりのキルヒホッフの第2法則と、ダイオード D2, 抵抗まわりのキルヒホッフの第2法則、キルヒホッフの第1法則、ダイオード D1, D2 の特性の式より



$$\begin{cases} V_E - V_{D1} - RI_{Rb} = 0 \\ -V_{D2} + RI_{Rb} = 0 \\ I_{D1} = I_{D2} + I_{Rb} \\ I_{D1} = \frac{V_{D1} - V_T}{r} \\ I_{D2} = \frac{V_{D2} - V_T}{r} \end{cases}$$

以上の式から, $I_{Rb} = \frac{V_E}{2R+r}$, $I_{D1} = \frac{1}{r} \left(\frac{R+r}{2R+r} V_E - V_T \right)$, $I_{D2} = \frac{1}{r} \left(\frac{R}{2R+r} V_E - V_T \right)$ であり, $I_{D1} > 0$, $I_{D2} > 0$ の条件より,

$$\frac{R+r}{2R+r} V_E - V_T > 0 \quad \text{かつ} \quad \frac{R}{2R+r} V_E - V_T > 0$$

$$\therefore V_E > \frac{2R+r}{R} V_T$$

したがって, $V_{Eb} = \frac{2R+r}{R} V_T$

(B) (c) コンデンサーにはもともと電荷が蓄えられていなかったため, S_1 を閉じて十分時間が経つと, 2つのコンデンサーには同じ同量の電荷が蓄えられる. すると, コンデンサーの基本式 (電荷) = (電気容量) × (電圧) より, 2つのコンデンサーにかかる電圧は電気容量の反比例する.*1

したがって, コンデンサー C_2 にかかる電圧は, $V_{2a} = \frac{C_1}{C_1+C_2} V_E$ となる.

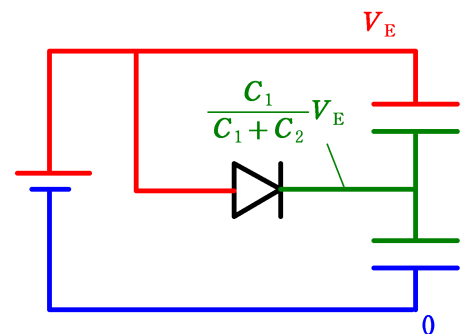
S_2 を入れた直後, ダイオード D に電流が流れる条件は, ダイオード D の電圧が V_T よりも大きいときなので

$$V_E - \frac{C_1}{C_1+C_2} V_E > V_T$$

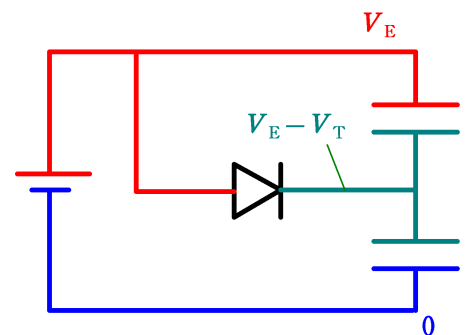
$$\therefore V_E > \frac{C_1+C_2}{C_2} V_T$$

したがって, $V_{Ec} = \frac{C_1+C_2}{C_2} V_T$

ダイオード D の電流が流れた後, ダイオード D の電圧が V_T になるとこれ以上電流が流れなくなる. したがって, $V_{2c} = V_E - V_T$

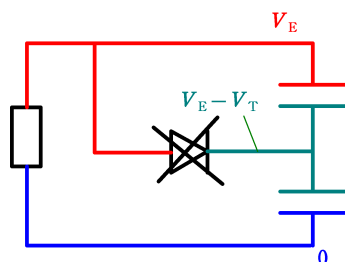


スイッチ S_2 を入れた直後

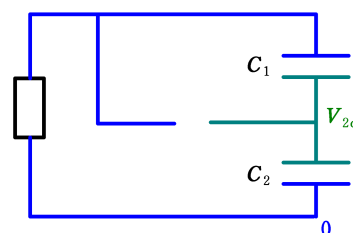


十分時間が経った後

(d) スイッチを A に切り替えた後, 抵抗に電流が上から下に流れ, 容量 C_1 のコンデンサー



切り替え直後



十分時間が経過

*1 電気量保存とキルヒホッフの法則で普通に求めてもよい.

の電位が下がる。すると、ダイオード D の左側の電位が下がるため、以後ダイオード D には電流が流れない。(c) の十分時間が経った後に容量 C_1, C_2 にかかる電圧がそれぞれ $V_T, V_E - V_T$ なので、蓄えられる電荷はそれぞれ $C_1 V_T, C_2 (V_E - V_T)$ となる。したがって、孤立部分の電荷の和は

$$-C_1 V_T + C_2 (V_E - V_T)$$

となる。この問いにおいて、十分時間が経った後に容量 C_1, C_2 に蓄えられた電気量をそれぞれ Q_1, Q_2 (それぞれ電圧計の + 側の電荷と設定) とする。電荷保存則と、コンデンサーの基本式から

$$\begin{cases} -C_1 V_T + C_2 (V_E - V_T) = Q_1 + Q_2 \\ Q_1 = C_1 V_{2d} \\ Q_2 = C_2 V_{2d} \end{cases}$$

これらの式より、 $V_{2d} = \frac{C_2}{C_1 + C_2} V_E - V_T$

(C) (e) ダイオード D に電流が流れていないとき、導体棒にはたらく力の斜面に平行な成分は $mg \sin \theta$ のみであるから、加速度は $g \sin \theta$ である。時刻 t における導体棒に速度を v とすると、等加速度運動の速度の式より

$$v = (g \sin \theta) \times t$$

であり、導体棒の速度に垂直な磁束密度の大きさは $B \cos \theta$ であることに注意して、導体棒に生じる誘導起電力は

$$v \times (B \cos \theta) \times l = (Blg \sin \theta \cos \theta) \cdot t$$

キルヒホッフの法則より

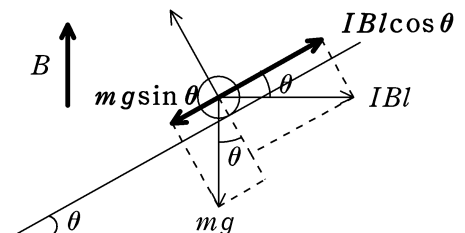
$$V_D(t) = (Blg \sin \theta \cos \theta) \cdot t$$

(f) 電流が流れるのは $V_D(t) = V_T$ のときだから

$$(Blg \sin \theta \cos \theta) \cdot t_1 = V_T \quad \therefore t_1 = \frac{V_T}{Blg \sin \theta \cos \theta}$$

(g) 十分時間が経った後に速度が一定になるので、導体棒にはたらく力の和は 0 となる。このときに回路に流れている電流を I とすると、導体棒にはたらく斜面平行成分は右図のようになる。力の和が 0 なので

$$\begin{aligned} IBl \cos \theta &= mg \sin \theta \\ \therefore I &= \frac{mg \tan \theta}{Bl} \quad \dots(*) \end{aligned}$$



ダイオードの特性の式より

$$I = \frac{V_{Dg} - V_T}{r} \quad \dots(2^*)$$

$$(*), (2^*) \text{ より, } V_{Dg} = \frac{mgr \tan \theta}{Bl} + V_T$$

(h) $x = L$ に達したときの導体棒の速度を v とすると、誘導起電力は $vBl \cos \theta$ だから、キルヒホッフの法則より

$$vBl \cos \theta - V_{Dg} = 0 \quad \therefore v = \frac{V_{Dg}}{Bl \cos \theta} \quad \dots(3^*)$$

電磁力がする仕事を $W_{\text{電}}$ とすると、導体棒について力学的エネルギー変化と非保存力の仕事の関係から

$$\frac{1}{2}mv^2 - mgL \sin \theta = W_{\text{電}} \quad \dots(4^*)$$

また、導体棒の誘導起電力を $W_{\text{誘}}$ とすると

$$W_{\text{誘}} = W \quad \dots(5^*)$$

また、 $W_{\text{電}} + W_{\text{誘}} = 0 \quad \dots(6^*)^{*2}$ であるから、(4*), (5*), (6*) より

$$\frac{1}{2}mv^2 - mgL \sin \theta = -W$$

(3*) より

$$\therefore W = mgL \sin \theta - \frac{1}{2}m \left(\frac{V_{Dg}}{Bl \cos \theta} \right)^2$$

3

(A)

(B)

*2 ローレンツ力が仕事をしないことから理解できる